

◆ 第64回年会日程

会場 東京学芸大学（東京都小金井市貫井北町4-1-1）

10月6日（土）

09:30-10:00 理事会（S203）
10:00-12:00 評議員会（S203）
11:30- 受付開始（S棟1階中央）

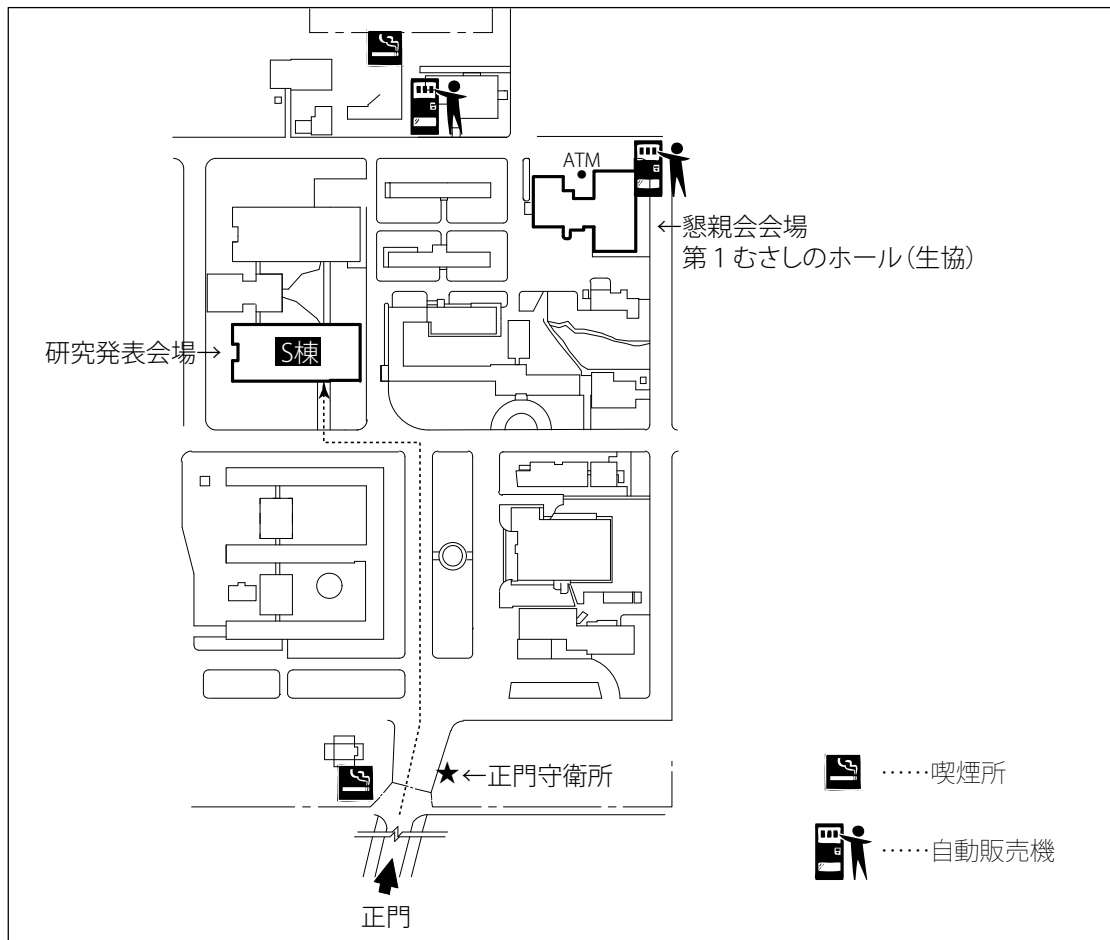
全体会（S410）

13:00-13:10 開会挨拶 実行委員長
会長挨拶 常光徹（千葉県）
13:10-13:20 会場説明 事務局長
13:25-14:10 記念講演 石井正己（東京都）「テキストとしての柳田国男」
14:20-17:30 公開シンポジウム「伝承」
基調報告 野本寛一（奈良県）
「伝承知の発掘とその活用」
基調報告 川島秀一（神奈川県）
「飛島の「山帳」における書承の実態」
基調報告 鈴木正崇（東京都）
「伝承を持続させるものとは何か」
司会
藤井弘章（愛知県）・岩田重則（東京都）
17:30- 研究奨励賞授賞式・会員総会
18:30-20:30 懇親会（第1むさしのホール〔生協〕）

10月7日（日）

08:30- 受付開始（S棟1階中央）
09:00-12:00 個人発表・グループ発表（S棟各会場）
13:00-16:55 個人発表・分科会（S棟各会場）

◆ 構内図（一部）



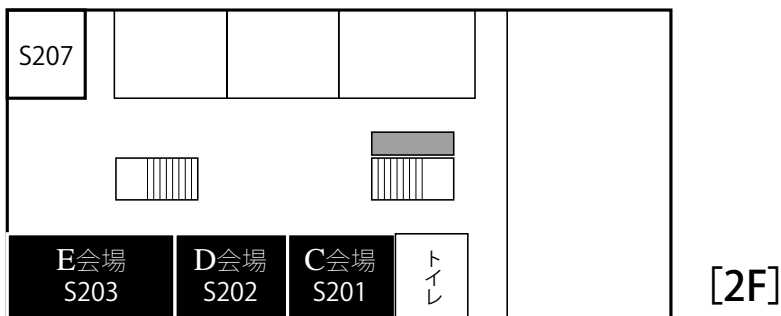
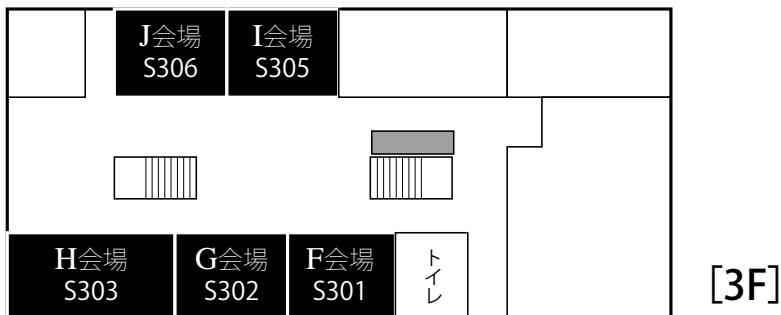
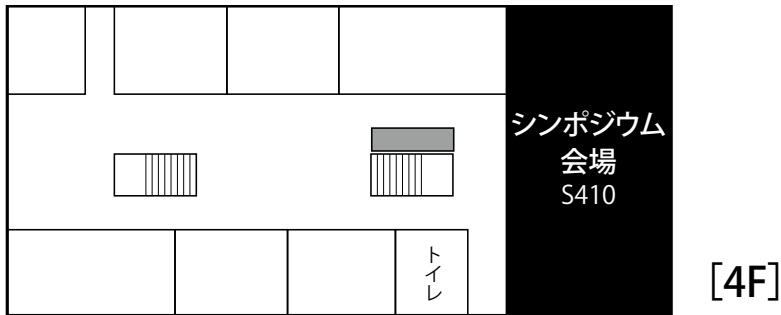
■ 南講義棟（S棟）

- 年会本部・事務局（S101）
- 休憩室（S102）
- 抜き刷り配布コーナー（S102）
- 書籍・研究雑誌コーナー（S103）
- 研究発表会場（次頁参照）

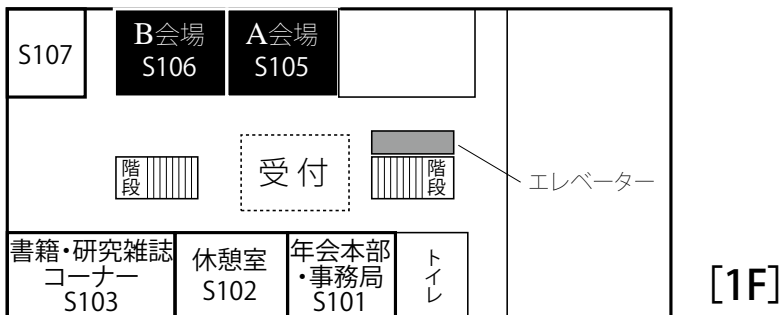
■ 第1むさしのホール（生協）

- 懇親会会場

◆ 発表会場



(6日午前中 理事会・評議員会会場)



・7日(日)のお昼休みには、S107を飲食コーナーとして開放しますので、こちらもあわせてご利用ください。

・休憩室には**抜き刷り配布コーナー**を設けていますのでご利用ください。

S棟(南講義棟)平面図

◆ プログラムと発表要旨 10月6日(土)

○ 記念講演要旨

S410 教室 13:25~14:10

テキストとしての柳田国男

石井正己(東京都)

昭和37年(1962)から刊行が始まった『定本柳田国男集』は、柳田の文章を総合的に見るための基盤を整備した。抒情詩・談話筆記・対談や座談は除いたが、全31巻・別巻5冊で構成され、全集に近い収録を実現した。しかし、当初は25巻・別巻3冊構成であり、これほどの規模を想定していたわけではなかった。途中で柳田が亡くなり、「先生の御遺志」という言葉が一人歩きしつつも、それを利用しながら再構成した結果である。しかも、その際に、初めて水木直箭の書誌を参照したことが推測される。

そして、別巻第5に「総索引」が入ったことは大きい。正確には「主要語句索引」であったが、それによって膨大な著作をすべて読まなくても、必要な言葉を引いて読むことが可能になった。これに「書誌」「年譜」を合わせれば柳田国男研究ができるようになり、多くの論文や書物が書かれた。その結果、いかにも安易な研究が量産され、『定本柳田国男集』未収録の文章が発見されれば実績になった。やがて、便利であった「総索引」の語句も当時の関心を出るものではなく、現代社会と向き合うことが困難になった。

そもそも、民俗学は「柳田以後」を標榜し、「研究史」に封印することで、アカデミズムとしての自立を図ろうとしたところがある。生前はタブーだった柳田国男研究に深い関心を抱いたのは、思想史、歴史学、社会学、教育学など他分野の研究者であった。だが、『定本柳田国男集』に乗るかたちで研究を進めたので、テキスト自体を問うことは考えなかった。やがて柳田批判と柳田擁護に二極化するうちに、研究は閉塞感を深め、一方、民俗学は次第に活力を失って、「落日の中の民俗学」と揶揄されることになった。

そうした状況がどれほど意識されていたかは心許ないが、平成9年(1997)から『柳田国男全集』の刊行が始まり、現在、33巻まで来ている。これはテーマ別の構成を採用せず、単行本編と新聞・雑誌編をそれぞれ時系列で構成した。『定本柳田国男集』の未収録を掲載しただけでなく、単行本の初出の新聞・雑誌に当たるなど、可能な限りの作業を行ってきた。しかも、この間に情報化が急速に進み、未発見の資料が発掘されることも少なくなく、本文編として残るのは没後の文章と書簡、そして補遺になった。そこで、この機会に「テキストとしての柳田国男」が喚起するいくつかの問題を申し上げてみることにした。

○ 公開シンポジウム

S410 教室 14:20~17:30

伝承

野本寛一（奈良県） 川島秀一（神奈川県） 鈴木正崇（東京都）
司会 藤井弘章（愛知県） 岩田重則（東京都）

シンポジウムは「伝承」をテーマとした。

民俗学は、フィールドワークに基づき具体的民俗事象から課題を設定し分析を行なう、人文科学のうちの一分科科学であるが、その流動化が言われるようになって久しい。何をもって民俗学とするのか、人それぞれであり、また、いまだ多い柳田国男論（近年はその周辺にまで拡大しているが）は民俗学そのものとは似て非なるものである。

シンポジウムでは、民俗学が仮に一人文科学として成立しているならば、最大公約数として学問上の共通理解がなければならないと考える。その共通理解とは、民俗学がどれほど多様化し流動化しようとも、その対象が「伝承」として継承されてきた社会・文化・生活事象であると思われる。あるいは、民俗学は、認識方法・分析方法として、社会・文化・生活事象を「伝承」として把握しているといった方がよいかもしれない。そこで、今回のシンポジウムでは、この「伝承」を、現在のように変動の激しい社会で、どのように再認識するのか、それを課題として設定した。

古い民俗学のように、民俗事象を特定のパターンに押し込めるのではなく、現実の社会変動が教えてくれる「伝承」の多様性とは、また、社会変動のなかでなぜ「伝承」が継続するのか、それらを異なる視点と異なる研究対象を持つ報告者によって、フィールドからとりあげたいと考えている。つまり、社会変動による民俗事象の変化であってさえも、民俗がなくなったとか都市民俗（やや古いが）とするのではなく、いっぼうで、新規な現象を民俗事象としてとらえとびつくのではなく、民俗学がその基本的な認識方法、方法論としてきた「伝承」として把握するということである。報告をお願いした野本寛一・川島秀一・鈴木正崇の3氏は、生産生業・社会伝承・儀礼伝承研究、さらには、ライフヒストリー研究を豊富なフィールドワークによって実践してきた研究者である。表面的なフィールドワーク、また、他の人文科学で流行する枠組の安易な導入を避け、民俗学を一人文科学として成立させる基本的な方法論、「伝承」を具体的なフィールドワークのなかから検証したいと考えている。

伝承知の発掘とその活用

野本寛一（奈良県）

榊原省三（さかきばらしょうぞう）さん（昭和 23 年生まれ）は静岡県浜松市天竜区横川で榊原商店⁽¹⁾という製材所を営み、合わせて、天竜区水窪（みさくぼ）町奥領家で「天竜新月材センター・天竜 TS ドライシステム協同組合」を主導している。昭和 45 年から製材業に携わり、良材供給のために試行錯誤を重ねてきた。杉の伐採適期は木が水を上げなくなる 8 月の盆過ぎから 3 月までだという伝承を守り、葉枯らし乾燥も続けてきた。一般に葉枯らし乾燥をすればテッポームシ（カミキリムシの幼虫）の害はないと言われているのだが、現実には葉枯らし乾燥をした木材にもテッポームシが穴をあけ、材を台なしにしてしまう。どうしたらよいのか。模索は続いた。

榊原さんに光を与えたのは「新月伐採法」だった。それは、下弦の月から新月までの闇夜めぐりの日に木を伐採し、上弦の月から満月にかけての月夜めぐりの日には伐採をしないという、月の盈虚を前提とした伐採法である。この伐採法と葉枯らし乾燥、さらに、製材後の材の屋内天然乾燥を組み合わせれば、材には虫もつかず、黴も生えず、ヒビも入らない。ただし、待ちの時間が必要となり、材の値も割高になる。

榊原さんはどのような契機で新月伐採法に踏み切ったのだろうか。それは、平成 15 年 9 月 5 日、京都で行なわれたエルヴィン・トーマさんの講演を聞いたことだという。トーマさんはオーストリアのザルツブルグの生まれだ。チロル地方の営林署で 6 年間働き、その間新月伐採材の良質性の土着的な伝承に耳を傾け、自からそれを実証した。トーマさんの体験は『木とつきあう知恵』（地湧社、2003）にまとめられている。

じつは、日本でも闇夜めぐりの日の樹木伐採奨励、月夜めぐりの日の植物伐採禁忌の伝承は吉野・熊野地方を中心に根強く伝えられている。そして、伐採・伐採の奨励・禁忌にかかわる植物や営為は多岐に及んでいる。㊦建築用木材 ㊧樽丸材 ㊨屋根板 ㊩檜皮 ㊪杓子・木地材 ㊫シイタケボタ ㊬杉皮 ㊭稲刈り ㊮雑穀刈り入れ ㊯種蒔き ㊰栗の実拾い、などがある。㊱竹。竹については特に巖正で、「竹は旧暦 8 月の末闇」（五條市大塔町惣谷）、「竹は旧暦 9 月の新月」（吉野郡野迫川村檜股）などがある。私もこうした伝承に関心を持ち『熊野山海民俗考』（人文書院、1990）などで事例を紹介しているのだが、林業者・製材業者・植物学者などとの連携を怠り、伝承知の掘り下げ・共有化・活用の扉を開くことができなかった。深い自省を禁じ得ない。眠っている膨大な伝承知の活用は、この国の閉塞状況に風穴をあける一つの力になるにちがいない。

註 1 屋号 正

飛島の「山帳」における書承の実態

川島秀一（神奈川県）

本来ならば「伝承」という言葉が、民俗学の研究史の中で、どのように定義され続け、どのように変容したのかを位置づける作業を先に経なければならぬわけであるが、今回は、具体的に 3 世代にわたって山アテの技法が書き継がれてきた事例をとおして、「伝承」という意味を考えなおしてみることにする。

山形県酒田市の飛島では、山アテのことを「山を立てる」と表現しているが、その記憶を略図と共に「山帳」と呼ばれるものを書きとどめ、それぞれが所蔵している漁師が多い。コピー印刷を行なって出回ることがあるくらい、飛島では著名な「ヤマ」もあるが、原則として他の漁家には伝えることがない。

本発表では、飛島で大正・昭和・平成の 3 代にわたって作成されてきた某家の 9 冊の「山帳」を、ていねいに比較することで、「書承」（文字による伝承）の実態を報告してみたい。

それらの「山帳」を読むかぎり、「山帳」というものは先代のものをそのまま参考にするわけではなく、それぞれが使いやすいように、再度、作成されることが一般的である。沖に行くと海から見える山や磯の重なり具合を確かめ、自身が使いやすいように一冊ごとにその役割を与えられている。漁船が GPS を用いる時代になっても、必ずノートとボールペンは船に入れておくものだとわれ、あるいは「山帳」は自分で書いてみなければ身に付かないものとも言われている。

それぞれの「山帳」は、魚種ごと、季節ごと、あるいは主に用いるヤマの方面ごとに作成されているように思われる。一つ一つのヤマは、先代の表現をそのまま踏襲する場合が多いが、その並び替えや配列は各自の使いやすさを念頭におかれているようである。特に「山帳」の〈文体〉に関しては、そのまま崩すことなく伝えているが、この〈文体〉でないとヤマを覚えられないともいわれる。飛島にかぎらず、各地の山アテの記録は、その地方独自の記録方法を伝えているようである。

これまで、山アテの記録は、どちらかといえば民俗の研究者が必要な情報源としてのみ活用されることが多かったが、どのような契機で書き始め、どのような様式で書かれ、書くことで操業にどのように活かされたかなどの、書き手の側の思いなども交えながら、書承を含めた「伝承」の意味を捉え直してみたい。

伝承を持続させるものとは何か

鈴木正崇（東京都）

今回のシンポジウムでの私の役割は、「宗教民俗学の観点から、宗教と民俗との習合・重層を『伝承』として理解できないか」という問い掛けに答えることであった。この古典的とも思える問いに対して、「フィールドワークの回想」程度の話ならできると答えて引き受けた。しかし、正直に言って、伝承について考えると、民俗とは何かを問うことであり、民俗学という学問自体が存続しうるのかという課題にも直結する重要な主題である。短時間で議論できる主題ではない。そこで、今回は伝承とは何かを問うのではなく、私自身が20年から30年にわたって続けているフィールドワークを通じて、「伝承を持続させるものとは何か」という観点からかなり主観的に語ることにした。そして、日本の事例に止まらず複数の海外の事例を呈示して組み合わせ、普遍的な「伝承」の在り方に迫る。ここでの方法は、「比較民俗学」ではなく、特定の事例や地域にこだわり変化の過程を重視し、個別性から普遍性に至る道を探ることである。検討する事例は、日本の備後の比婆荒神神楽、中国のミャオ族の祖先祭祀ノンニウ、南インドの祭祀演劇クーリヤーッタム、バリの村祭りウサバ・サンバーである。地域は、日本、東アジア、南アジア、東南アジアに広がるが、主題は民間信仰あるいは民俗宗教をめぐる伝承の問題であることでは一貫している。

比婆荒神神楽は、広島県北部の東城・西城（現在は庄原市に編入）で伝承されてきた神楽である。「名」を単位として祀られる本山三宝荒神を主神として式年ごとに大神楽を執行する。明治以降は、複数「名」が合同した「地区」を単位に、13年ないしは33年に一度行われてきた。最後には神柱（しんばしら）による神がかりの託宣を聞き、藁の籠は荒神社に納められて再び招かれる日を待つ。平成23年（2011）12月には東城町竹森で33年の式年の大神楽が行われた。私自身は、前回の昭和54年（1979）9月の大神楽を見学しており、長い歳月を経て同じ場所、同じ当屋での大神楽に巡り合うことになった。どのようにして伝承の持続が可能になったのかを、連続性と非連続性、変化の過程を追いながら伝承の実態に迫る。

中国貴州省の黔東南や黔南の山地に住むミャオ族（Miao）は、ノンニウ（nongx niel）という祖先祭祀を13年に一回、父系血縁集団が合同で行う。木鼓や銅鼓を叩いて祖先や死者の靈魂を呼び覚まして村に招いて歓待し、蘆笙の音で慰撫して、最後に数十頭の水牛を供犠して祖先を故地に送り返す。山地に散在して生活する人々が大規模に交流し、死者を祀ると共にこれを機会に新たな配偶者を見つけ、社会の存続を図る。ノンニウは1949年以降の社会主義化、大躍進（1958～1960）、文化大革命（1966～1976）、改革開放（1978～）などの政治・経済・社会の大規模な変動の中で「迷信活動」として禁止されたが命脈を保ち、1980年代後半以降の経済成長の波に翻弄されつつも復活を遂げ、一部は急速な観光化の波の中で巨大イベントに変貌した。ノンニウに関しては1985年、1997年、2009年の各丑年を指標にして変化を追いかけてきた。1997年と2009年、1999年と2011年の同じ村でのノンニウの変化を追いつつ、イデオロギーとコスモロジーのせめぎ合いを検討する。

南インドのケーララ州のヒन्दゥー教の大寺院では年間の大きな祭りに際して、内部のクータンバ

ラムという特別の施設で、サンスクリット語の演劇、クーリヤーッタム (kutiyāttam) が、特定のカースト (ジャーティ) によって奉納される。10 世紀までは遡ると推定される最古のサンスクリット劇である。複雑な目や顔の動きのアビナヤ、手印のムドラ、わずかな台詞などで神々の物語を展開し、九つのラサ (情感) を表現する。伴奏は壺太鼓ミラーブと小鼓 (こづつみ) イダッキヤである。少年や少女の頃から師匠の下でひたすら芸を学ぶことで義務を果たす。トリシュールのワダックナータン寺院では 41 日間にわたりシヴァ神に奉納する。人間に見せる芸ではなく、神への奉仕であり、わずかな報酬を得るだけである。担い手はアンバラワーシィ (寺院奉仕者) と呼ばれ、カーストは男優はチャーキヤール、壺太鼓はナンビヤール、女優はナンギヤールで、演技形式は集団劇のクーリヤーッタムの他に、男性の一人芝居のチャーキヤールクートウ、女性の一人舞のナンギヤールクートウ (クリシュナの物語を演じる) がある。しかし、1950 年代にはパトロンであった王族や大寺院の援助が絶えて、衰退の道を辿りつつあり、伝承の維持に向けての試みが始まった。寺院外での初演は 1956 年、芸術学校の課程にも 1965 年に組み込まれた。G・ヴェーヌが 70 年代半ば以降、演者と共同して芸を復興し、徐々にカースト外に広がって舞台芸として再生して存続の危機を脱し、2001 年にはユネスコの「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」に登録された (2008 年以降は「無形文化遺産」に統合)。グローバル化が進展し、商業化の波と儀礼の奉仕の狭間で翻弄されつつも、カーストという社会編成を近代化にある程度は適応させ、芸能の伝承の維持の原動力にした。さらに、祭祀演劇を存続させる力として、身体性に関わるドーシャム (障り) の考え方が大きな働きを果たしてきた。

バリ東部のカラングスマ県に位置し、バリ・アガの人々が住むトゥンガナン・プグリンシンガン (Tenganan Pegringsingan) は、独自の慣習法 (アダット) に基づいて、村落の秩序を厳格な村内婚で維持し、複雑で長時間にわたる儀礼を遂行する。儀礼にはグリンシンという縦横縞 (double ikat) が使用され、神聖な楽器スロンディンが奏でられる。外見上は観光化が進んでいるように見えながらも、村の独自の暦に従って奉仕する年間の祭りは、ほぼ変わることなく維持されている。特に、5 月から 6 月の一月間に行われるウサバ・サンバーは、完璧に近い伝承の体系を持ち、ひたすら精緻に儀礼を構成していく。独身者で構成される若者組 (トゥルナ) と娘組 (ダハ)、妻帯者の大人組 (クラマデサ)、そして長老組という年齢階梯制と、大人組の集会場 (バレアゲン) での「座」の儀礼と供物の交換、果てしなく続くヤシ酒の大地への供進と中核にあるムタブー (供犠) の概念、そして樹木、水、石、山の生命力との交感など、時空間を意味付ける濃密な場が形成される。言葉による知識と体験による智慧を極限まで精緻化する内旋 (involution) である。人間の営みは、山と森が織りなす自然の中に溶け込んでいくように見える。近年では、強固な経済的基盤と平等な所有権で支えられてきたこの村にも変化の兆しが見られるが、伝承の持続へのこだわりは強烈である。バリとの付き合いも 20 年を超えた。ロマン的に語るのではなく、現実を冷静に見つめ直し、伝承の持続の秘密とは何かという答えのない問いに挑んでみたい。

◆ プログラムと発表要旨 10月7日(日)

○ 研究発表の進行表

A会場 (S105 教室)

9:00～12:00

◇グループ発表「ヤオ族の神々の民俗」

- | | | |
|-----|-------------|----------------------------------|
| A-1 | 譚静 (神奈川県) | 神画の複製作業からヤオ族伝統文化の保存と創意を考える |
| A-2 | 三村宜敬 (岡山県) | 送船儀礼の日中韓比較 |
| A-3 | 廣田律子 (神奈川県) | 儀礼の実践と「盤王歌」 |
| A-4 | 浅野春二 (神奈川県) | 還家願儀礼における掛灯と招兵——中国湖南省過山系ヤオ族の事例から |

休憩

13:00～17:00

◇分科会「広域調査の意義と再考——移動・生業・分布・比較」

- | | | |
|-----|------------|---|
| A-5 | 磯本宏紀 (徳島県) | 近代出稼ぎ漁民による以西底曳き網漁業と技術移動
——双方向からみる人と技術の移動 |
| A-6 | 松田睦彦 (千葉県) | 近代採石業者の移動の実態——移動する日常へのまなざし |
| A-7 | 木村裕樹 (大阪府) | 流動する木地職人——会津漆器産地の事例から |
| A-8 | 藤井弘章 (愛知県) | ウミガメの民俗の地域差——全国調査から見えてくるもの |
| A-9 | 赤羽正春 (新潟県) | 鮭のハツナ儀礼——ロシアと日本の比較 |

B会場 (S106 教室)

9:00～12:00

◇グループ発表「講研究のこれから——結集原理の検討を見据えて」

- | | | |
|-----|------------|------------------------------|
| B-1 | 西村敏也 (東京都) | 御眷属講に関する一考察——釜伏講と大岳講の考察を中心に |
| B-2 | 乾賢太郎 (東京都) | 職縁による参拝講——高尾山講の事例から |
| B-3 | 関敦啓 (東京都) | 木曾御嶽講先達に関する一考察——行者の行法・帰属意識から |
| B-4 | 牧野眞一 (埼玉県) | 稻荷講と祭祀集団——その形態と変容 |

休憩

13:00～16:00

◇分科会「小さき者へ——民俗学からの提言にむけて」

- | | | |
|-----|--------------|--|
| B-5 | 後藤麻衣子 (千葉県) | 鳥追い行事における子ども |
| B-6 | 神かほり (東京都) | 東京都八王子市滝の「福の神」行事について |
| B-7 | 服部比呂美 (神奈川県) | 長野県飯田市上久堅越久保の「事念仏」・「事の神送り」 |
| B-8 | 及川宏幸 (宮城県) | 子どもたちを支援する伝承のあり方として
——博物館における民俗伝承活動等の実例報告 |

C会場 (S201 教室)

9:00～12:00

◇グループ発表「女のサイフ——昭和を生きた女性と労働」

- C-1 長谷川方子（青森県） 暮らしを支える嫁の「稼ぎ」——生活の規範のなかで
C-2 鈴木由利子（宮城県） 生業（なりわい）としての産婆——職業意識との関わりで
C-3 小林奈央子（愛知県） 木曾御嶽の女性強力——生業の延長にあった賃金労働
C-4 齋藤典子（東京都） 伊豆半島の海女のテングサ労働と稼ぎの行方

休憩

13:00～15:00

◇分科会「マイノリティ文化の伝承と創造——祭りを通して再生される民族（民俗）芸能」

- C-5 有澤知乃（東京都） 横浜関帝誕の中国文化——ローカル華僑からグローバル華僑へ
C-6 磯田三津子（埼玉県） 京都東九条マダンの韓国伝統音楽
——在日コリアンの祭りが創造する伝統芸能の新たな意味
C-7 マット・ギラン（東京都） 都市のマイノリティ文化交流における多文化主義

D会場 (S202 教室)

D-1 9:00～9:25

中野泰（茨城県） 占領期における「森林社会学」構想とその実際

D-2 9:30～9:55

河野眞（愛知県） 現代民俗学のための二つの着眼点

D-3 10:00～10:25

菊地暁（京都府） 瀝青会随行記——今和次郎『日本の民家』再訪調査で考えたこと

D-4 10:30～10:55

刀根卓代（東京都） 瀬川清子の民俗観——成育歴は研究者の民俗観に影響を与えるか

D-5 11:00～11:25

岸本昌良（東京都） 柳田国男と神社合祀と大逆事件

D-6 11:30～11:55

佐藤喜久一郎（群馬県） 高麗人の氏子駈け——帰化人出現 政治とエスニシティの民俗学

休憩

D-7 13:00～13:25

板橋春夫（群馬県） 産屋民俗再考——敦賀・若狭の産小屋調査から

D-8 13:30～13:55

鈴木明子（東京都） 月経の伝承

D-9 14:00～14:25

泉泰輔（神奈川県） 喪服習俗の研究

D-10 14:30～14:55

岡田真帆（神奈川県） 埋葬墓地と石塔墓地に対する日常的行為の連続性と断絶
——香川県観音寺市両墓制の事例から

D-11 15:00～15:25

大森拓也（大阪府）

塩飽諸島本島における両墓制と先祖信仰

D-12 15:30～15:55

胡艶紅（茨城県）

中国太湖流域における大型漁船漁民の祖先祭祀

——女性を媒介とした関係の観点から

E 会場（S203 教室）

E-1 9:00～9:25

倉石美都（東京都）

韓国の男根信仰——男根石の性格とその機能

E-2 9:30～9:55

安藤有希（千葉県）

韓国三陟市における男根観光——海神堂公園を事例に

E-3 10:00～10:25

川邊絢一郎（神奈川県）

観光資源としての温泉——熱海温泉郷を主な対象として

E-4 10:30～10:55

坂元一光（福岡県）

地域文化の活用から探求へ——酒田商工会議所女性会の傘福復興事業

E-5 11:00～11:25

矢島妙子（東京都）

「土地」による新たな価値生成——ローカルヒーローの対内的・対外的効果

E-6 11:30～11:55

玄蕃充子（東京都）

都市型養蜂の現状と課題——「ミツバチプロジェクト」の事例を中心に

休憩

E-7 13:00～13:25

山中健太（京都府）

生活者にとっての「生活改善」

——兵庫県宍粟郡千種町における「生活改善」の受容と背景

E-8 13:30～13:55

王京徽（滋賀県）

「おかずつかみ」から見た琵琶湖内湖の伝統的利用と変化

E-9 14:00～14:25

守本雄一郎（奈良県）

タタラ生業が自然環境と地域社会に与えた影響

——特に岡山県新庄村とその周辺地域を中心に

E-10 14:30～14:55

大森恵子（京都府）

河川掌握と川の神・水の神の祭祀形態の考察

——中世の西園寺家とその遺跡を中心にして

E-11 15:00～15:25

近藤功行（沖縄県）

地域の伝統行事と小中学校の休校状況

——伝統文化の継承を沖縄の事例から探る視点

F 会場（S301 教室）

F-1 9:00～9:25

岩野邦康（新潟県）

伝承を設計する

——Social Networking Service における「いいね！」ボタンの理論民俗学的考察

- F-2 9:30～9:55
坪井亜弥（埼玉県） 現代「怪異」事情
- F-3 10:00～10:25
古谷野洋子（茨城県） 南の島の農耕文化——波照間島の畑作の事例から
- F-4 10:30～10:55
小池淳一（東京都） 職人巻物の儀礼性
- F-5 11:00～11:25
柿本雅美（京都府） 伝統産業の維持と継承——奈良墨の行方
- F-6 11:30～11:55
中島順子（大阪府） 地域の産業が形成する職人社会——近江の手縫い製靴業を事例に

休憩

- F-7 13:00～13:25
才津祐美子（長崎県） 屋根葺き方法の変化と担い手の職人化——岐阜県白川村荻町地区を事例として
- F-8 13:30～13:55
青木啓将（埼玉県） 日本刀に宿る「力」
- F-9 14:00～14:25
阿部宇洋（山形県） 歴史民俗資料としての石造物——草木供養塔を通して
- F-10 14:30～14:55
松隈雄大（神奈川県） 屋根裏伝承と建築儀礼
- F-11 15:00～15:25
石川俊介（長野県） 長野県諏訪の木遣り唄——御柱祭での役割を中心に
- F-12 15:30～15:55
西嶋一泰（東京都） ページェント運動と民俗芸能——坪内逍遙・小寺融吉・日高只一
- F-13 16:00～16:25
藤原喜美子（兵庫県） 播磨の鶴林寺の鬼追いと筑紫との関わり

G 会場 (S302 教室)

- G-1 9:00～9:25
中村淳（長崎県） 再活用される自治会——住宅街における地域猫活動を事例として
- G-2 9:30～9:55
清水亨桐（神奈川県） 子ども組（セイトッコ）の社会的機能
——神奈川県三浦市初声町三戸のお精霊流しを事例として
- G-3 10:00～10:25
渡部鮎美（千葉県） 移住者の受け入れからみた地域像のゆらぎと再編
——新潟県十日町市松代を事例に
- G-4 10:30～10:55
平井芽阿里（愛知県） 祭祀組織の生成と再編成について——沖縄県宮古島西原を事例に
- G-5 11:00～11:25
保坂泰彦（東京都） 戦後入植地における結衆の論理——秋田県大潟村の大潟神社の建立をめぐって
- G-6 11:30～11:55
宮下良子（東京都） 在日コリアン寺院——都市空間に生成される宗教ネットワーク

休憩

G-7 13:00～13:25

山口拓（東京都）

県人会活動における「同郷」と現住地

——東京における新潟出身者の県人会活動を事例に

G-8 13:30～13:55

戸邊優美（大分県）

若者の「地藏出し」から女の「地藏担ぎ」へ

——女性のネットワークとしての婚礼

G-9 14:00～14:25

茂木謙之介（埼玉県）

近代皇族と地域社会——秩父宮会の活動の史的展開と現在

G-10 14:30～14:55

増埜勝敏（大阪府）

藤戸長太郎の足跡をたどって

——大阪府下における香川県出身者の企業活動と漁業経営

G-11 15:00～15:25

及川高（茨城県）

奄美親族の近代的再分節過程——親族組織と墓の象徴的対応関係を視角として

G-12 15:30～15:55

武井基晃（茨城県）

新「公益法人」制度と門中

G-13 16:00～16:25

岡山卓矢（宮城県）

構築されるイトコ——社会関係を記述すること

H会場（S303教室）

H-1 9:00～9:25

佐藤敏悦（宮城県）

東日本大震災における土葬の顛末

H-2 9:30～9:55

石井克玖（福島県）

原発事故が浮き彫りにしたもの——福島県いわき市の事例から

H-3 10:00～10:25

葉山茂（千葉県）

被災民家から生活用具・民具の救出する活動からみえる民俗学的課題

——東日本大震災における国立歴史民俗博物館の取り組みを事例に

H-4 10:30～10:55

原英子（岩手県）

震災遺族の恐山参り

H-5 11:00～11:25

加藤秀雄（千葉県）

生活復興と伝承の役割——東日本大震災における被災文化財救出活動の経験から

H-6 11:30～11:55

政岡伸洋（宮城県）

震災後の暮らしの再建過程と民俗学の課題

——宮城県南三陸沿岸の一村落の事例から

休憩

H-7 13:00～13:25

轟理恵子（鳥取県）

身体化された伝統継承の意義

——岡山県高梁市備中町平川地区における2つの祭礼

- H-8 13:30～13:55
大木慎司（千葉県） 中将姫伝説の成立と展開
- H-9 14:00～14:25
吉田扶希子（福岡県） 由布岳の性空上人
- H-10 14:30～14:55
菱川晶子（愛知県） 温泉発見伝説と動物——長野県鹿教湯温泉の場合
- H-11 15:00～15:25
山田栄克（東京都） 神奈川県浦賀の浦島氏と浦島伝承
- H-12 15:30～15:55
田野登（大阪府） 袈裟掛松考——動詞句を軸に読む樹木伝説の展開

I会場（S305教室）

- I-1 9:00～9:25
鈴木慶一（神奈川県） 「魂呼び」習俗の再検討
- I-2 9:30～9:55
高松広貴（神奈川県） 「気象民俗」研究に向けて——雨乞いと雷除け
- I-3 10:00～10:25
福西大輔（熊本県） 熊本県の雨乞い習俗と沈鐘伝説——鐘ヶ淵の雨乞い習俗を中心に
- I-4 10:30～10:55
澤井真代（神奈川県） 八重山川平集落の儀礼に携わる住民の多様な背景
——宮古、南洋、ヤマト、八重山
- I-5 11:00～11:25
久野俊彦（栃木県） 修験道聖教典籍の呪術書・和歌書とウタヨミの呪術
- I-6 11:30～11:55
清水博之（茨城県） 無形民俗文化財の伝承と保護に関する一考察——日立風流物を事例として

休憩

- I-7 13:00～13:25
江木淳人（奈良県） 滋賀県甲賀地域における祇園祭の諸相——特にハナバイ（花奪い）について
- I-8 13:30～13:55
黒田迪子（東京都） ジャランポン祭りにおけるマスメディア
- I-9 14:00～14:25
鈴木英恵（群馬県） 道祖神信仰にみるモニュメント道祖神の発生とその造立背景
——群馬県高崎市倉渕町を事例に
- I-10 14:30～14:55
水谷類（千葉県） 都市に生きるエビスコウ——「田の神」イデオロギーを克服するために
- I-11 15:00～15:25
渡瀬綾乃（茨城県） 下甕島における真宗寺院の在勤制度について
- I-12 15:30～15:55
角南聡一郎（奈良県） ガゴゼ伝承と元興寺
- I-13 16:00～16:25
朽木量（東京都） 真宗における仏壇と盆についての現代民俗学的考察——京都市J寺門徒の事例

I-14 16:30～16:55

佐治 靖 (福島県)

オシラ信仰と久渡寺——〈在来〉信仰の動的理解に向けて

J会場 (S306 教室)

J-1 9:00～9:25

林承緯 (台湾・新北市)

巡礼記にみる台北新四国八十八所霊場の実態

J-2 9:30～9:55

真野俊和 (新潟県)

聖跡巡礼と「聖地巡礼」——四国遍路再定義のために

J-3 10:00～10:25

荻野夏木 (東京都)

近世後期における疱瘡習俗——患者、宗教者の視点から

J-4 10:30～10:55

原田寿真 (熊本県)

近代的癩の出現

J-5 11:00～11:25

小山田江津子 (千葉県)

高知県中土佐町の大漁旗——久礼地区を事例として

J-6 11:30～11:55

萩谷良太 (茨城県)

担ぎ出される大きな木太刀——招福除災の道具が意味するもの

休憩

J-7 13:00～13:25

劉洋 (神奈川県)

菊人形の前提としての菊栽培

J-8 13:30～13:55

松岡薫 (茨城県)

ある祝賀行事にみる造り物と仮装行列の一側面

J-9 14:00～14:25

沼田愛 (宮城県)

「民俗芸能」の創造プロセスに関する一考察

——「みんなのもの」としての秋保の田植踊をめぐって

J-10 14:30～14:55

稲垣利詠子 (神奈川県)

昔話「竹姫」の話型と諸問題

J-11 15:00～15:25

瀬戸口真規 (千葉県)

難題モチーフの研究——「異類婚姻譚」を中心に

J-12 15:30～15:55

福寛美 (千葉県)

琉球開闢おもろの太陽神「てだ一郎子」について

J-13 16:00～16:25

須永敬 (福岡県)

壱岐の神楽と神職集団

J-14 16:30～16:55

川野裕一郎 (東京都)

子ども世代と民俗芸能——備中子ども神楽と広島「神楽甲子園」の事例から

○ 研究発表のタイムテーブル（1 / 2）

会場名 教室名 定員（人）	A会場 S105 64	B会場 S106 64	C会場 S201 60	D会場 S202 60	E会場 S203 104
9:00～9:25	●グループ発表 A-1	●グループ発表 B-1	●グループ発表 C-1	D-1 中野泰	E-1 倉石美都
9:30～9:55	譚静 A-2	西村敏也 B-2	長谷川方子 C-2	D-2 河野眞	E-2 安藤有希
10:00～10:25	三村宜敬 A-3	乾賢太郎 B-3	鈴木由利子 C-3	D-3 菊地暁	E-3 川邊絢一郎
10:30～10:55	廣田律子 A-4	関敦啓 B-4	小林奈央子 C-4	D-4 刀根卓代	E-4 坂元一光
11:00～11:25	浅野春二	牧野眞一	齋藤典子	D-5 岸本昌良	E-5 矢島妙子
11:30～11:55				D-6 佐藤喜久一郎	E-6 玄蕃充子
12:00～13:00	昼食				
13:00～13:25	◆分科会 A-5	◆分科会 B-5	◆分科会 C-5	D-7 板橋春夫	E-7 山中健太
13:30～13:55	磯本宏紀 A-6	後藤麻衣子 B-6	有澤知乃 C-6	D-8 鈴木明子	E-8 王京徽
14:00～14:25	松田睦彦 A-7	神かほり B-7	磯田三津子 C-7	D-9 泉泰輔	E-9 守本雄一郎
14:30～14:55	木村裕樹 A-8	服部比呂美 B-8	マット・ギラン	D-10 岡田真帆	E-10 大森恵子
15:00～15:25	藤井弘章 A-9	及川宏幸		D-11 大森拓也	E-11 近藤功行
15:30～15:55	赤羽正春			D-12 胡艶紅	
16:00～16:25					
16:30～16:55					

○ 研究発表のタイムテーブル（2 / 2）

会場名	F会場	G会場	H会場	I会場	J会場
教室名	S301	S302	S303	S305	S306
定員	60	60	104	60	60
9:00～9:25	F-1 岩野邦康	G-1 中村淳	H-1 佐藤敏悦	I-1 鈴木慶一	J-1 林承緯
9:30～9:55	F-2 坪井亜弥	G-2 清水亨桐	H-2 石井克玖	I-2 高松広貴	J-2 真野俊和
10:00～10:25	F-3 古谷野洋子	G-3 渡部鮎美	H-3 葉山茂	I-3 福西大輔	J-3 荻野夏木
10:30～10:55	F-4 小池淳一	G-4 平井芽阿里	H-4 原英子	I-4 澤井真代	J-4 原田寿真
11:00～11:25	F-5 柿本雅美	G-5 保坂泰彦	H-5 加藤秀雄	I-5 久野俊彦	J-5 小山田江津子
11:30～11:55	F-6 中島順子	G-6 宮下良子	H-6 政岡伸洋	I-6 清水博之	J-6 萩谷良太
12:00～13:00	昼食				
13:00～13:25	F-7 才津祐美子	G-7 山口拡	H-7 靄理恵子	I-7 江木淳人	J-7 劉洋
13:30～13:55	F-8 青木啓将	G-8 戸邊優美	H-8 大木慎司	I-8 黒田迪子	J-8 松岡薫
14:00～14:25	F-9 阿部宇洋	G-9 茂木謙之介	H-9 吉田扶希子	I-9 鈴木英恵	J-9 沼田愛
14:30～14:55	F-10 松隈雄大	G-10 増埜勝敏	H-10 菱川晶子	I-10 水谷類	J-10 稲垣利詠子
15:00～15:25	F-11 石川俊介	G-11 及川高	H-11 山田栄克	I-11 渡瀬綾乃	J-11 瀬戸口真規
15:30～15:55	F-12 西嶋一泰	G-12 武井基晃	H-12 田野登	I-12 角南聡一郎	J-12 福寛美
16:00～16:25	F-13 藤原喜美子	G-13 岡山卓矢		I-13 朽木量	J-13 須永敬
16:30～16:55				I-14 佐治 靖	J-14 川野裕一朗